

(続紙 1)

京都大学	博士 (地域研究)	氏名	岡本 正明
論文題目	民主化した多民族国家インドネシアにおける安定のポリティクス		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、1998年のスハルト体制崩壊で著しい混乱に陥ったインドネシアの政治が安定を回復する過程や仕組みを、ジャワ島西部のバンテン地方における臨地調査に基づいて実証的に解明しようとする試みである。</p> <p>序章では先行研究を丁寧に紹介し、独自の分析視角を提示する。インドネシアでは、スハルト権威主義体制が倒れる直前から2000年代前半までの間、各地で政治的秩序が乱れた。宗教紛争や民族紛争が発生し、独立運動も起きた。日常的にも労働争議が頻発し、農民は土地奪還運動に乗り出し、学生は都市部で連日デモを繰り広げた。治安悪化に伴い、自警団を兼ねる暴力集団が闊歩するようにもなった。インドネシアという国家や想像の共同体が崩壊するのではないかと懸念されるほどであった。しかし、そうした不安定はその後の数年間で解消された。それはいかにして可能となったのか。これを本論文の主たる問いとして提起する。</p> <p>1章では、民主化と地方分権が安定に寄与したという観点から、本論文の見取り図を示す。国政では政治エリートの連続性が穏健中道路線の定着を助けた。地方政治では細分化の政治と合従連衡の政治が機能した。</p> <p>2章から4章では、植民地時代から1998年にかけてのバンテン地方の政治経済史について詳述する。2章ではイスラーム指導者ウラマーと無頼漢ジャワラという2種類の地方指導者の特徴と役割を紹介する。3章では1949年からスカルノ時代にかけてのバンテン州設置運動の経緯を説明する。4章ではスハルト体制が支配網をどのように張り巡らせていたのかを解明している。スハルト政権期に政治行政を担った軍隊、行政機構、与党ゴルカルが、住民に浸透して支配するには在地権力との折り合いをつける必要があった。地方指導者のうち、ウラマーは政権に利用されるにとどまり権威を低下させたのに対して、ジャワラは中央政府への協力者として庇護を受けつつ、暴力も行使して、経済力や政治力を蓄えた。</p> <p>5章では、スハルト体制崩壊後の「改革」について考察する。懐柔と抑圧を通じた脱政治化装置はスハルト体制とともに瓦解し、分離主義運動、民族紛争、宗教紛争、学生・農民・労働者の運動が活性化し、政治は不安定になった。スハルトを継いだハビビは、大統領及び地方首長の公選を含む民主化、地方への大幅な権限移譲を伴う分権化、自警団の容認も含んだ治安維持の民営化を推進することで対処しようとした。その結果、地方自治体への権限委譲と自治体の細分化という二重の地方分権が生じた。「細分化の政治」である。バンテンでも念願の州設置が2000年に実現した。</p> <p>6章ではバンテンで最も有力なジャワラであるハサン・ソヒブが、暴力と財力で州</p>			

政治を掌中におさめる過程を生々しく描いている。7章では首長選挙を考察する。2005年から翌年にかけて全国362の自治体で首長公選が実施された。副知事候補には、知事候補とは宗教、民族、出身地域が異なる人物を擁立することが通例となった。本論文はこれを「均衡の政治」と名付けて、政治の安定を促したと説明する。

8章では、1970年代から学生の間で活発になったイスラーム復興運動の流れを汲む組織が1998年に結成した政党の動向について分析する。同党は1999年総選挙では苦杯をなめるものの、その後は政治的清廉さの強調ばかりではなく、現実路線、穏健路線を選択して党勢を伸ばした。とりわけ地方政治では、権力に接近しようとするれば妥協を強いられた。これが政治の安定に寄与していることを明らかにしている。

9章では、インドネシア各地の事例を比較検討して、バンテンで政治の安定をもたらした細分化の政治と均衡の政治が、ほかの地方にも妥当すると論じている。

(論文審査の結果の要旨)

インドネシアでは、1998年に、32年間政権を握っていたスハルトが退陣に追い込まれた。政変後には、宗教紛争や民族紛争が多発し、独立運動も起きた。労働争議が頻発し、農民が土地奪還運動に乗り出し、学生が都市部で連日デモを繰り広げた。そうした混乱や不安定の中、民主化と地方分権が始まった。本論文は、当初の悲観的な観測に反して、政治的安定が実現した理由を、ジャワ島西部のバンテン地方に焦点を当てて、実証的に解き明かしている。本論文は、以下の点において、優れた学術研究として高く評価しうる。

第一は独自の切り口である。インドネシアにおけるスハルト体制の崩壊後の民主化・分権化については、数多くの先行研究がある。その大半は民主化や地方分権の現状を調査し、不十分さを指摘し批判することに重点をおいている。しかし、インドネシアの政治は、東南アジア地域ではもっとも民主的であるという国際的な評価を2006年以後得るようになってきている。インドネシアは民主化の落第例ではなく成功例なのである。また、先行研究は、スハルト体制崩壊当初には、民主化や地方分権よりも、政治的安定が焦点の課題となっていたことを軽視しがちでもある。本論文は、上首尾な民主化実現の鍵の1つが安定であると看破して、先行研究が安定の重要性を見逃してきたと的確にも指摘し、安定がどのように実現したのかを解明しようとする点において新鮮である。

第二に、細分化の政治と均衡の政治という新しい分析概念を提示することによって、安定が回復した仕組みを明快に解き明かすことに成功している。まず、分権化は当初の予定よりもはるかに多くの自治体を誕生させた。これは、一方では中央政府への財政負担を増やすことになったけれども、他方では各地の民族集団間、宗教集団間、地域間の格差の緩和につながり、政治的安定の実現に貢献した。次に、新たに導入された地方自治体首長公選制では、得票数の最大化を目指して、地域間、民族集団間、宗教集団間のバランスを考慮した正副首長候補の組み合わせが選ばれるようになった。その結果、政治対立は地域内、民族集団内、宗教集団内に閉じ込められ、局地化・縮小化が進んだ。この説明は独創的であり、説得力もある。

第三は調査と分析の厚みである。本論文は、インドネシア語文献の渉獵のみならず、インドネシア人も尻込みするようなジャワラと呼ばれる暴力集団への果敢な参与観察も交えた丁寧な臨地調査に立脚している。インドネシア研究のみならず、政治学、行政学、人類学といった複数のディシプリンの手法を用い、また歴史的視野を100年以上にわたる長期に設定することによって、奥行きや広がりのある分析に成功している。本論文は、情報量の多さや分析の明晰さにおいて、世界最高水準のバンテン地方政治

研究となっている。

第四に、本論文は視野をバンテンに限定することなく、バンテン研究を国政研究と巧みに噛み合わせることによって、地方の描写から国政の変化を見事に描きあげること成功している。スハルト体制はどのように支配していたのか、その崩壊は地方にどう波及したのか、民主化や地方分権で地方に何が生じたのか。それが地方という現場の視点から生き生きと描き出されている。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成23年1月21日、論文内容とそれに関連した事項について試問した結果、合格と認めた。